



必要性、交流活動の目的や対応を教職員が共有する重要性を指摘した。

日本の学校教育では、ヴォランティアや介護体験、学校行事への招待等の交流が1970年頃から実施されてきた。児童・生徒にとって、特にケアを必要とする高齢者を支援する交流活動は、人の役に経つ喜びを知り、福祉について考える機会となり得るが、公衆衛生や高度医療の進展によって健康を維持できるようになった現代社会では、65歳以上を一律に受動的な弱者として位置づけるのは妥当ではない。近年は、学校施設の開放や転用、学校支援ヴォランティアやゲストティーチャーといった地域人材の活用により、高齢者が児童・生徒を支援したり一緒に参加するという活動形態も見られるようになってきた。しかし、その大半はイベント的なものであり、日常的な交流や「なじみの関係」への発展は困難であるのが実情である。さらに、2005年10月から12月に行った世代間交流に関する教育行政の取り組み調査<sup>6)</sup>では、学校支援ヴォランティアを対象とした研修会を実施している自治体は僅か4.8%であり、頻度や内容にも差が認められた。

世代間交流では「関与の質」が重視されてきており、「どのように関わるか」ということは交流活動の効果に大きく影響する。本研究の究極的な目的は、日本の学校における世代間交流活動の質的向上を図るために、子どもを支援する中年・高齢者の事前研修・スキルアッププログラムを作成することである。そこで、義務教育段階の学校に中年・高齢者を派遣する事業（Klassmorfar：クラスのおじいちゃん）を実施しているスウェーデンのプログラムを研究対象として設定した。ポストロム<sup>7)</sup>によれば「クラスのおじいちゃん」候補者には、毎月開催される定例会でお互いの経験を交換し合って能力を向上させる機会が与えられており、2001年春からは研修が開始されている。前述の目的を達成するための一段階として、2007年9月、Klassmorfarを導入している学校を訪問し、子どもや教師、Klassmorfar、Klassmorfarの基礎教育・研修担当者、Klassmorfarプログラム事務局メンバーへの聞き取り調査を行った。

## 2. Klassmorfarプログラム

Klassmorfarプログラムはストックホルム・ナッカで1996年に開始され、現在は全国規模に拡大している。Klassmorfarに対する研修は2001年から始まり、現在も継続して行われている。コミュニケーションの中で

Klassmorfarを導入しているのは69、活動のある市町村は163である。現在活動しているのは男性が330名、女性が179名、合計566名である。そのうち59歳以上が278名となっている。また、男性18名、女性11名が、教育期間中である（表1）。

表1 Klassmorfarの実数（地域別）

Län/förvaltningsområde	Antal kommuner i 15-årsgruppen	Antal kommuner med KM	Under utbildning					Antal 59 år över 59 år	Urlandsak
			Anställda män	Anställda kvinnor	Anställda totalt	Män	Kvinnor		
Borås/Sjöbo	4	1	12	4	16	8	7	6	3
Dalarna	15	9	36	22	58	0	0	38	1
Fyrbodal	14	7	9	21	30	0	0	12	2
Gävleborg	10	2	5	0	5	0	0	0	0
Hälsjöland	6	5	51	53	104	7	0	72	11
Södermanland	9	7	60	15	75	0	0	54	12
Skaraborg	21	9	9	11	20	0	0	2	4
Släne	33	10	61	13	74	3	4	0	0
Stergöteborg	11	8	33	28	61	0	0	44	17
Stockholm	26	12	45	1	46	0	0	43	18
Värmland	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Örebro	12	5	9	11	20	0	0	7	2
<b>Totalt</b>	<b>163</b>	<b>69</b>	<b>330</b>	<b>179</b>	<b>566</b>	<b>18</b>	<b>11</b>	<b>278</b>	<b>70</b>

Klassmorfarの目的は、学校に経験豊かな大人が「常に」いることで教職員の安定を図り、すべての子どもが居心地良く、安心して過ごせるように支援することにある。そのため、子どもを中心として教職員にも配慮し、学校の雰囲気や和らげるとともに、子どもを見守る存在としての大人を学校に配置することで、落書きや施設・器物の破損、いじめの防止に貢献している。「すべての子どもは我々の子どもである」がKlassmorfarのテーマである。

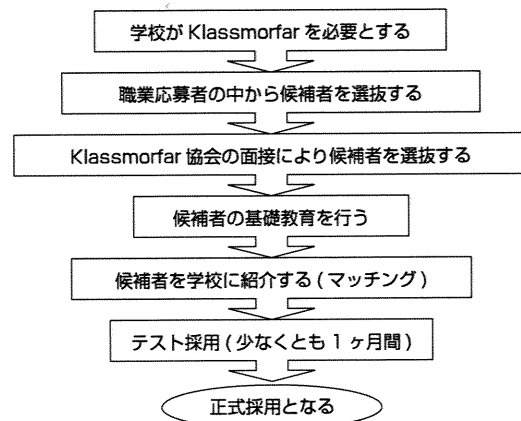


図1 Klassmorfar受け入れまでのプロセス

Klassmorfarとして活動するためには基礎教育を受講する段階で選抜されなければならない。事務局や基礎教育・研修担当者による面接では、①子どもが好きなか、②子どものニーズに配慮できるか、③積極的

に子どもとかかわることができるかという3点が重視される。また、問題が発生した場合や子どもとの接し方についての場면을提示し、どのように対応するかを質問する。このような面接は基礎教育中の実習でもスキルアップのための研修にも取り入れられている。Klassmorfar候補者として基礎教育を受講していても、その段階でさらに選抜されることもある。また、履歴については情報収集を徹底しており、特に子どもに対する性的虐待や犯罪は、軽微なものだったとしても、Klassmorfarとして採用することはない。

#### (1) クングスバッカにおける活動

ハーランド・クングスバッカはヨーテボリの南に位置する人口7万人の市である。この地域でKlassmorfarの基礎教育と研修を担当しているレナート教授、Klassmorfar歴3年のヨハンソンさんとともに、ヨハンソンさんが活動しているノヴァ・モンテッソーリ基礎学校を訪問した。

この学校ではKlassmorfar専用の時間割があり、主にどのクラスで活動するのかを、毎日、校長と打ち合わせて決めている。

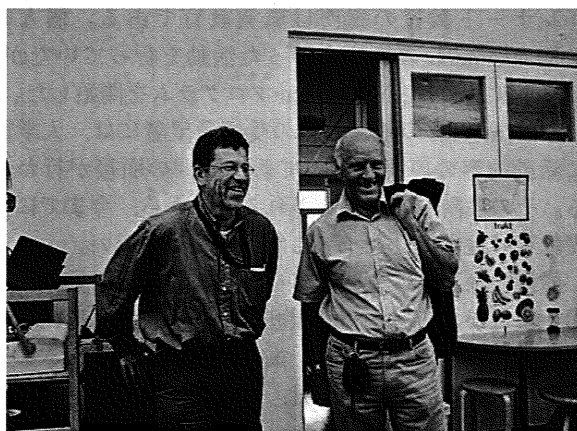


写真1 ヨハンソンさん(左)、レナート教授(右)

#### 校長の話から

Klassmorfarを導入することを決定したのは校長自身である。しかし、1人でも反対する教師がいたら実現しなかっただろう。学校に教師以外の第三者が介入する場合、保護者だけでなく教師の理解と協力がなければ難しい。子どもたちはもともと落ち着いていたが、Klassmorfarが関与することにより、親とのコミュニケーションが良好になってきた。単親の家庭が

多く、精神的なケアが必要な場合も増えてきており、Klassmorfarはそのような子どもの資料を持っていて問題点を把握している。



写真2 学校の外観

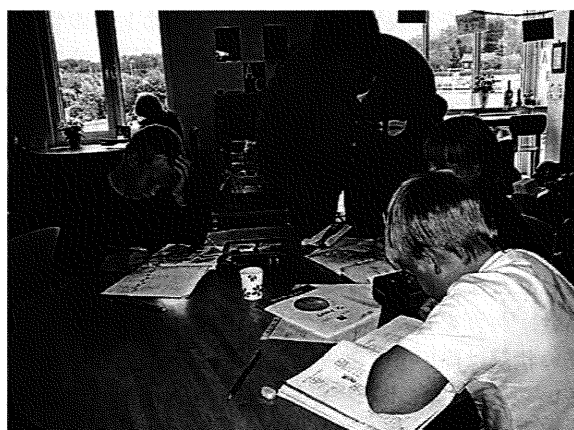


写真3 Klassmorfarの活動の様子1

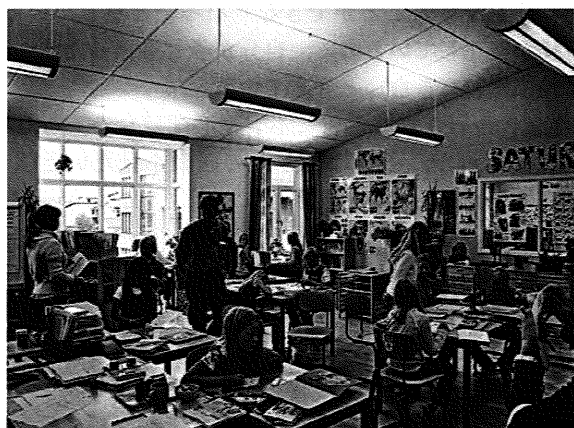


写真4 Klassmorfarの活動の様子2

ヨハンソンさんは、算数がわからないでいる子どもからの質問に答えたり、教材の中に出てくる象のジェスチャーをして楽しませたりする等、全体を見渡しながらか子どもとの相手をしていた。また、教室の外にいる子どもにも積極的に話しかける等、あらゆる機会を活用してコミュニケーションを図っていた。

Klassmorfarの介入によって教師は教育に集中できる。子どもたちは教師以外の大人の存在をプラスに捉えている。この学校には200名の子どもが在籍しているが、Klassmorfarは毎朝、登校する子どもたちを校門に迎え、1人ずつ握手をして目を見て挨拶し、話している。同様の対応は、後述するナッカでの活動においても行われている。

#### ヨハンソンさんへのインタビューから

Klassmorfarの研修は年2回、春と秋に行われており、いずれかに参加する義務がある。新しいコミュニケーションの方法を学んだり、課題や体験談等を話し合っ情報交換する。Klassmorfarは1つの学校に1人で活動することが多いため、通常は同じ立場の人と相談することができない。問題を持ち寄り、他の解決方法がないかディスカッションすることは極めて重要である。

Klassmorfarは教室の中だけで子どもと関わるのではなく、トイレや更衣室、校庭も巡回する。そのような目立たない場所で子ども同士のトラブルを見つけた場合、ケガをしたり保護者に報告する必要があるほど酷い状況は除いて、教師とも情報を共有しないことも多い。その理由は子どもとKlassmorfarとの信頼関係を崩さないためである。教師との役割分担は明確で、いじめの解決はKlassmorfarの仕事である。

最近の学校では、子どもたちに上の立場から話をしたり注意をすることができなくなったと感じている。時代が変化しているので、自分が子どもだった頃とは単純に比較できないと考えている。

Klassmorfarになる前に不安や心配はなく、むしろ自信があった。それは子どもの面倒を見たいと強く願っていたからである。

Klassmorfarの仕事で最も重要であり、心がけているのは「子どもに聞ける環境をつくること」である。

Klassmorfarとして活動することのメリットには、生活の手当てはもちろんであるが、自分自身が必要とされているという認識を得られることがある。

子どもの社会的な能力を伸ばすことが学校の教育方針であるが、教師にはそのための十分な時間がない。

Klassmorfarの介入によってそれが達成できるため、学校の評価は高くなる。したがって、Klassmorfarが学校側に要望することは大半が受け入れられ、そのことが学校の特色にもなっている。安心して子どもを通わせることができるとして、保護者へのアピールにもなっている。

活動開始当初の2、3ヶ月は教師から疑いの視線を向けられることもあったが、積極的に働きかけることによって現在ではプラスの評価を得ている。この点は他の学校のKlassmorfarも同様である。子どもや保護者との信頼関係がないと、この活動は継続できない。

Klassmorfarは基礎学校だけでなく、高校にも導入されており、クングスバックでは2名が高校で活動している。面接の際に希望する学校段階を質問するが、活動のスタイルや研修内容に違いはない。

自分が活動している学校では現在、25ヶ国の子どもが在籍しており、コミュニケーションをとることが困難になっている。子ども同士で会話ができないことが最大の問題であり、それをつなげる役割の大人が必要である。

#### レナート教授へのインタビューから

レナート教授の専門は職業教育である。個人的にKlassmorfarの性格を持った活動を行っていたが、2004年9月よりKlassmorfarプログラムを開始した。

Klassmorfarの基礎教育の受講希望者には、入学前に活動内容の説明を含めて約1時間の面接が行われる。その段階で選抜がなされることから、今までに基礎教育の途中でリタイアした受講生はいない。

面接では事前に質問内容を示して答えを準備させておく項目がある。また、履歴や免許・資格の他に現在の生活、以前の仕事内容、失業理由等も記入するようになっている。面接の当日、その場での即答を求める質問には以下の項目がある。

- Klassmorfarになった場合、自分には何ができると思うか。また、自分の弱点は何か。
- Klassmorfarとして、何をしたいのか。どのような目標をもっているのか。
- Klassmorfarの仕事に応用できる特別な知識や経験があるか。
- 問題が発生した時に、(対応できる)限度を確定できるか。
- 決定が素早くできるか。
- 問題の解決に慣れているか。
- 人前にいることを好むか。

- ・自分を見本として示すことができるか。
- ・子どもと若者たちは（自分と）平等な立場だと思えるか。
- ・新しいグループに溶け込むのは簡単だと思えるか。

ハーランドのKlassmorfar基礎教育には、2007年だけで100名の受講生がいる。受講生の人数に応じて得られるコミュニティからの助成はレナート教授が所属するルフタンダーレン芸術学校の収入源のひとつとなっている。経済的な理由を挙げてKlassmorfarの導入に踏み切らないコミュニティや反対する政治家も多いが、賛同を得るために、子どもの健全な成長を支援することが犯罪の減少につながることを説明している。

また、Klassmorfarが活動している様子を、地域や保護者に知らせていくことも重要である。

Klassmorfarの基礎教育や研修の内容は、理論と実習の繰り返りで構成されている。資料1から資料5は、ハーランドで既に活動しているKlassmorfarの研修スケジュールである。地域によって多少の違いはあるものの、Klassmorfarプログラムとしての共通要素は①Klassmorfarの役割、②発達や心理等の子どもに関する内容、③学校という組織や教職員の仕事について、④支援方法（コミュニケーションや身体表現等）の4項目である。

1日目	集合、自己紹介、ガイダンス Klassmorfarについての説明 コミュニティの中で現在活動している学校 学校の組織、教育計画と学校の計画 (学校長の講演)
2日目	学校の基礎的な事項 子ども、養育、聞く能力、限度についての共同活動 決定判断能力の不足、教育を学ぶことと意義（動機） 学校の今と昔、知識の今と昔、教育モラルの今と昔 候補者自身の学校時代
3日目	学校はどのように活動しているのか？ 学校組織と教育学（学校長の講演） 学校において仕事と人生経験をどのように活用したらよいか 保護者会などの活動 学校における多様な文化
4日目	Klassmorfarとして期待されていること グループ・ディスカッション 生徒の個性について（教員の講演）
5日目	Klassmorfarの活動と役割 実習の準備 実習活動事項

資料1 Klassmorfarの研修内容（第1週）

1日目	第1回目実習でのグループ活動における経験の改善 実習活動の説明
2日目	子どもにどのように学ぶか、子どもにどのように対応するか？ いろいろな指導方法 限度の設定、共有保持させる方法
3日目	年齢差による特有個性 子どもの養育 子どもの成長と必要性
4日目	問題のある子ども／静かな子ども 普通の子どものとは何か？ 特別教科の先生の訪問
5日目	両親の役割／先生の役割 その他の学校職員とKlassmorfarの役割 次回の実習活動内容の準備

資料2 Klassmorfarの研修内容（第2週）

1日目	調節 実習項目の説明 問題発生とその解決方法
2日目	文化の違いと、文化の違いによる摩擦 移民の両親と経験の交換
3日目	現状維持する方法と限度 子どもたちの交流経験（警察官の講演）
4日目	問題発生時におけるKlassmorfarの役割 子どもたちとの交流経験 (人権保護委員課職員の講演)
5日目	今週のテーマのまとめと改善 実習の理論教育への実行内容を説明

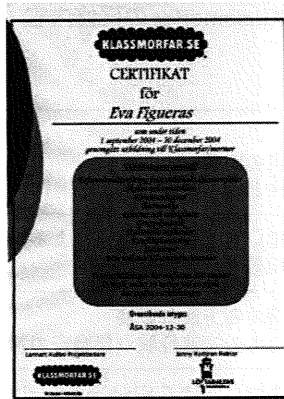
資料3 Klassmorfarの研修内容（第3週）

1日目	最後に実習した体験の交換と実習事項の復習 感情の表現と身体による意味表示
2日目	グループ・プロセス 形式的なリーダー 若者たちとの仕事について (コミュニティの社会福祉課職員の講演)
3日目	いじめと障害 児童精神、心理相談所職員がグループを訪問
4日目	コミュニティが主催する継続教育コースに参加
5日目	社会構成とは何か 次の実習準備 今週の要約

資料4 Klassmorfarの研修内容（第4週）

1日目	チェック 実習項目の経過報告 信頼（信用）／秘密保持 学校相談員／学校看護師の学校での役割を説明
2日目	学校における（自分の）今後の役割 学校内におけるいろいろな職員との交流 私は誰か？強い面と弱い面
3日目	他の学校訪問 今秋でのグループ活動で特別に注目したいものは何か？
4日目	秋の理論講習を要約する 今までの授業や実習でできなかった質疑応答を復習
5日目	ガイダンス 支援、評価

資料5 Klassmorfarの研修内容（第5週）



資料6 修了認定証

め、打ち合わせを1週間ごとに行う。1年前にストックホルムでの基礎教育を受講し別の学校でテスト採用されたが、正式採用には至らなかった。この学校はKlassmorfarに対する受け入れの状態が良いと感じる。

出身はユーゴスラビアである。生活のために様々な仕事をしたが、会社を経営した経験があるので人の扱いには慣れていていると思う。Klassmorfarの基礎教育を受講したきっかけは、2年前に亡命してきた時はスウェーデン経済が不況であり、就職が困難だったからである。友人の薦めで面接を受けた。

子どもの保護者には自分から挨拶をして信頼関係を築くようにしている。また、Klassmorfarとして活動する際に心がけているのは「子どもを信頼すること」であり、上の立場から介入することではない。

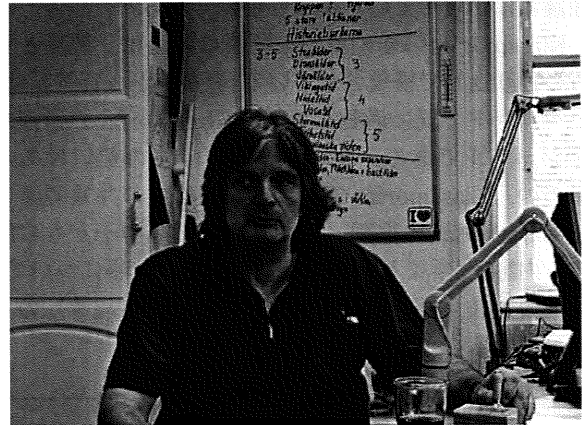


写真5 フランコさん

また、基礎教育の受講後に、テスト採用を経て正式採用に至るのも、Klassmorfarプログラムに共通するプロセスである。

基礎教育や研修を受講すると、修了認定証が発行される。これはKlassmorfarが別の仕事に就く場合にも提出することができ、キャリアとして見なされるようになっていいる。

## (2) ナッカにおける活動

ナッカでは、Klassmorfar事務局メンバーとともにカステロ・スコレンを訪問した。

この学校のKlassmorfarは、活動を始めて1ヶ月のフランコさんである。

### フランコさんへのインタビューから

12歳から16歳の生徒を担当している。この学校では教師の計画表に合わせて動くことになっているた

### 校長の話から

フランコさんの前に来ていたKlassmorfarは、教師からの指示を待つタイプであったため正式採用とはしなかった。フランコさんは最初の説明の後には自分から動いてくれるので助かっている。

この学校では、事務や調理担当者等、教師以外の職員にも子どもとの接し方についての教育が必要だと考えており、そのための機会を設けている。Klassmorfarも参加する。またKlassmorfarは、毎週月曜日の職員会議にも出席している。

### 子どもへのインタビューから

Klassmorfarは必要な時に言えば、何でも助けてくれる。毎朝入り口で生徒一人ひとりを迎えてくれる。挨拶されるのはとても嬉しい。みんなも同じ気持ちだと思う。

自分の祖母は2時間ほど離れた場所に住んでいるため、それほど会わない。

生徒の間であまりケンカはないけれど、あった場合にはKlassmorfarが対応してくれる。Klassmorfarは、問題が起こった時には必要だと思う。だから、Klassmorfarがいなくても良い状態、つまり問題が起こらないということが最も良いことだと思う。

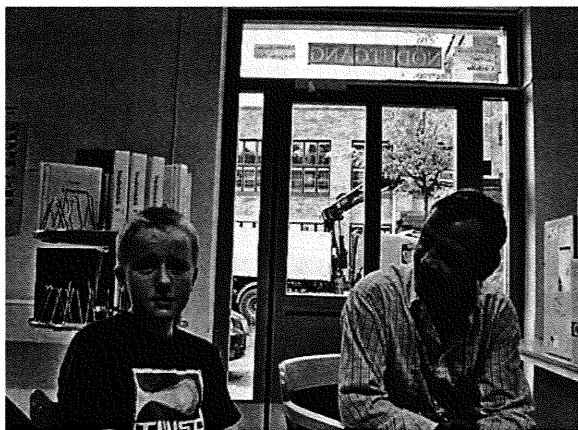


写真6 アントンくん (左側)

### (3) ストックホルムのKlassmorfar事務局

ストックホルム事務局にはKlassmorfarプログラム協会で採用された4人が常駐している。協会の運営費用は10ヶ所にわたる助成や補助金、手当等の財源によって賄われている。今回の訪問では、2名の事務局メンバーから説明を受けるとともに、パンフレット等の資料を得ることができた。

Klassmorfarは、ブラットさんという男性高齢者による個人的な活動から始められた。この段階では政府の失業対策と連携してはいなかった。一定の人数を集めて協会を設立すれば補助金が得られるため、全国的に参加者を募った。ブラットさんは2006年まで活動を続けていたが、スウェーデン国内に複数の拠点ができたので引退した。この活動の目標は、Klassmorfarの介入によって、教師と生徒がそれぞれに安心感を確保することである。

対象は義務教育学校である。高校での活動もあるが、数は少ない。また、子どもが成長した後では遅すぎると考えている。初等教育段階から関わるのが望ましいこと、義務教育学校が最も取り組みやすいので、力を入れている。

スウェーデンの学校でもいじめが増加しているこ

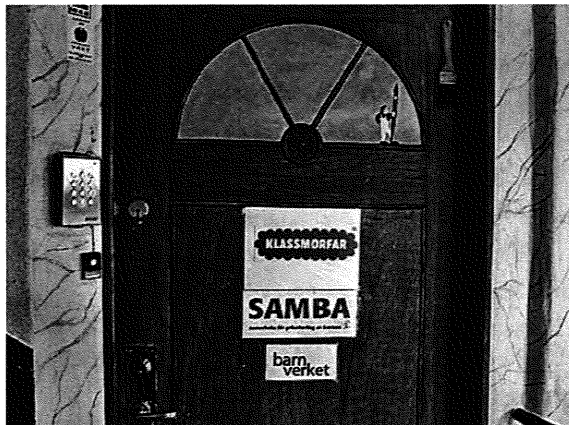


写真7 ストックホルム事務局の入り口



写真8 ストックホルム事務局の内部  
(奥の2名が事務局メンバー)

と、特別支援教育の必要性が高まっていること、教育が上から押し付けるものではなくなってきたこと等から、子どもを支援する大人の存在は重要となっている。

Klassmorfarが一般に理解されるようになるまで約10年かかった。その後は、学校側からKlassmorfarを導入したいという申し出があるようになった。

当初は経済的援助を得ることが難しく、子どもが割ったガラスや落書きを修繕する場合の費用と人件費を試算して提示すること、教師も精神的に助かること、子どもが落ち着くことで犯罪の減少につながる経済的価値等、長期的な経費を逆算して示すことにより、学校や政治家が賛同するようになってきた。ストックホルムにおける学校の器物破損費用は高額で、年間1,660万クローナにも上っている。教育レベルの最低限を確保するためには、ある程度お金がかかるのは当然で、

どんなに学校が教育レベルを上げたとしても問題を起こす子どもは必ず存在する。

一方、多くの子どもがストレスの多い日常を過ごしており、義務教育段階の9年間で25%がすべての学科で承認されている成績に到達せず、さらに10%が高校に進学する成績の承認が受けられない状況にある。また、精神的に不安定で身体症状を訴える子どもは14万人に上っている。

Klassmorfarは学校の仕事を横取りするのではなく、すべての子どもに平等に教育を受けさせる権利、受ける権利を保障する範囲内で仕事をする。

学校民営化によって宗教や移民等による問題や教育格差が生じる可能性が大きい。Klassmorfarは、学習環境の整備に貢献することができる。

さらに学校では、経費節減によって教師の数が減り、1人当たりの負担が増加している。また、若い教師の増加や定年間近の教師の多さに対して、中間世代は少ない。このアンバランスをKlassmorfarは補うことができる。したがって、子ども同士で話すことも大切ではあるが、特に若い教師のクラスに介入すると子どもが落ち着く様子が見受けられる。

Klassmorfarがすべての教育問題を解決できるわけではないが、特に初等教育の段階ではかなりの効果が期待される。しかし、明確な数値として示すことは困難であり、その点は今後の課題である。Klassmorfarが介入して1ヶ月後にクラスの平均点が上がったケースがあるものの、すべての学校がそうなるというわけではない。

しかし、いちどKlassmorfarを導入した学校では、そのKlassmorfarが別の職に就いた場合でも、他のKlassmorfarを派遣してくれるよう、事務局に依頼がある。つまり、それだけの効果があったということを確認したことになる。

Klassmorfar候補者の基礎教育中は、教育手当（失業手当に準ずる）が支給される。その一部は実習を受け入れる学校や基礎教育を行う機関等、教育訓練の場に支払われ、85%が候補者本人の収入になる。すべてのコミュニティは学校が行う成人を対象とした活動に援助資金が得られるようになっており、コミュニティからの申請を受けた政府はヴェンネル資金によってこれを補助する。政府はそのために5年間で約170億クロナの経費を計上している。また、テスト採用期間中の1年間は、学校に賃金の支払い義務はない。その後、契約によって正式な学校の職員となる。Klassmorfarは学校が採用することになるが、雇用税がかからない

ようになっている。その理由は、Klassmorfarが失業対策として認定されているからである。しかし、このシステムは国にとって現在のところテスト期間であり、将来的にどのようなようになっていくのかは未確定の状態である。

Klassmorfar候補者の面接においてハーランドでは質問シートを使用していたが、ストックホルム事務局では使用していない。質問の必須項目は共通している。例えばKlassmorfar候補者の技能（木工や音楽等）についてチェックはするが、何もかもできなければならないという意図ではない。事務局では、これらの技能に対する学校側のニーズを考慮してマッチング作業を行っている。面接では3人の事務局メンバーの意見が一致することを重要視するとともに、特に子どもに関する犯罪歴がないかを慎重に調査する。基礎教育や研修も同様で、ストックホルムでは少なくとも16から18週間をかけているが、講義と実習を繰り返すこと、既述した4項目の共通要素を含むことがKlassmorfarプログラムなのである。

多くのKlassmorfar候補者の中にはこの活動に適さない場合もある。基礎教育を修了し、例えば成績が優秀だったり優しい性格であったりしても正式採用にならないこともある。しかし、移民の子どもは出身国のKlassmorfarが介入することによってとても落ち着くために、外国人のKlassmorfar候補者はスウェーデン語の能力がそれほど高くなくても選抜し、採用されることが多い。基礎教育や実習の間は事務局が候補者を調整できることから、教師との連携ができていかといった報告に基づいて判断する。テスト採用期間を経て、そのまま同じ学校で正式採用となるケースもある。

ストックホルムでは職業安定所からのリストに基づいてKlassmorfar候補者を集めている。Klassmorfarプログラムは失業対策と連携することで活動資金を確保し、政府の援助を受けて拡大してきた。しかし、景気が回復すると応募者が減少する等経済状況により候補者の数が左右されるため、現在は他の仕事に就いているが、将来、Klassmorfarとしての活動を希望する人を対象として会員登録するシステムを創設した。事務局では職業安定所や学校への情報提供を重点的に取り組んでいる。候補者の集め方はそれぞれの地域によって異なり、ハーランドの場合はコミュニティが協力して広報を行っている。

コミュニティの理解が得られるかということは、Klassmorfarプログラムの継続・発展において極めて



重要である。全国的にはまだ情報が不足しており、ある地域ではKlassmorfarを導入する学校がなくなってしまった。Klassmorfarの活動を知らないコミュニティも未だにあることから、様々な働きかけによってKlassmorfarプログラムを一般化していくことが課題である。

### 3. おわりに

義務教育段階ではないが、日本でも高齢者を保育所等に派遣して日常的に子どもを支援する事業を実施している自治体がある。新潟県上越市の「保育園士雇用事業」、千葉県市川市の「中高年保育ボランティア事業」、栃木県黒磯市の「おじいちゃん保育事業」の実態と効果について考察した北村<sup>8)</sup>は、子どもや高齢者への効果だけでなく、地域福祉の向上という点でも新たな可能性を予感させる幼老ミックス型の複合施策モデルであると述べている。山梨県山梨市の「おじいちゃん先生・おばあちゃん先生派遣事業」や長野県塩尻市の「保育補助員設置制度」等、類似の事業がある自治体の保育所を対象として2007年8月に実施した調査<sup>9)</sup>では、派遣された高齢者に「依頼できる業務の質や量が異なる」、「保育のねがいが伝わらない」といった問題が回答された。このような問題に対して、時間が経るにつれて自然なかかわりがもてるようになる<sup>10)</sup>との報告もあるが、事前に打ち合わせる機会を設定して、仕事の分担を明確にしたり保育方針等を説明することにより、問題自体が発生しないよう対応していくことが重要であろう。実際に活動が始まってからも同様で、派遣される高齢者に求める役割や子どもへの接し方等について話し合い、調整を行うことも必要である。

自治体が保育を補助する高齢者を雇用する場合の利点として、高齢者の雇用促進や保育士との信頼関係が結ばれやすいこと、役割を明確化した保育所運営が可能である一方で、市町村の財政力によって事業の実施の実現が左右され、財政が悪化すると事業が打ち切られる状況では事業として不安定であることを福島<sup>11)</sup>は指摘している。

Klassmorfarプログラムは、失業対策との連携や協会の設立による補助金等、複数の財源を確保することで活動が安定し、継続することができている。また、Klassmorfar候補者の基礎教育やテスト採用というシステムによってプログラムの質を保証することは、教師や保護者の信頼を得るために役立っている。さらに

Klassmorfarとして正式に採用されてからも、研修によるスキルアップを行うことにより、活動の質的向上を図っている。それでもなお、Klassmorfarプログラムに対するコミュニティの認知は十分とは言い難い。

齋藤<sup>12)</sup>は米国の世代間交流プログラムを「環境整備」、「理解」、「ネットワーク」、「促進」の4点から評価し、それを進めるシステムが構築されていると述べている。Klassmorfarプログラムでは、特に「研究者と実践者のネットワークと協働運営」及びプログラムの促進に関わる「実践における評価方法の確立」の拡充が課題であることが明らかとなった。子どもに対するKlassmorfarの効果を多様な角度から客観的な評価データによって示していく必要がある。

一方、日本各地で行われている個々のインタージェネレーション活動では、参加者同士のネットワーク整備や活動の専任コーディネーターの設置、世代間交流による効果測定がほとんど実施されていない。日本世代間交流協会では2007年6月から2008年3月、世代間交流コーディネーターを養成するプログラムを確立するためのパイロットスタディ講座を開催し、全10回の講座のうち8回以上を受講した場合に修了証を発行した。各回の構成は、以下のテーマに関する約1時間の話題提供と約30分のディスカッションである。

- 第1回 公教育現場におけるコーディネーターの現状と課題：行政や地域との関わりから
- 第2回 日本の出産と世代間の交流・伝承について
- 第3回 世代間交流の推進と支援体制についての日米比較
- 第4回 地域福祉としての世代間交流の「担い手」と「場所」～京都市での実践事例より
- 第5回 世代間交流の視点からまちづくりを考える——「場」の交流から地域の日常へ——
- 第6回 世代間交流推進のためのネットワーク作り
- 第7回 学校におけるコーディネーションの諸問題
- 第8回 コーディネーター養成の基礎として「世代間交流概念の新たな可能性——発達論のパラダイム転換への“鍵”として——」
- 第9回 紙芝居の誕生と歴史、そして世代間交流
- 第10回 世代間交流コーディネーターの現状と課題～養成講座総集編

この養成プログラムや他の地域、団体で実施されている研修内容とその効果を検討し、「子どもを支援する中年・高齢者」に対する定期的で組織的な事前研修

とスキルアップシステムの確立や、世代間交流におけるこうしたシステムの重要性に対する認識を高めていくことが今後の課題である。加えて世代間交流コーディネーターを専門職として位置づける可能性についても、追究していきたい。

本報告は、平成19年度～20年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号19530548（研究代表者：白梅学園短期大学 草野篤子）によって行われた研究の一部であり、日本家政学会第60回大会（2008年6月1日）において発表した。

### 謝 辞

今回の調査にあたって、ストックホルム在住の高齢福祉社会専門家（アドバイザー）澤野正美氏には訪問先の依頼や日程の調整、インタビューでの通訳や資料の翻訳等で大変なご尽力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

### 参考文献

- 1) 矢島さとる・草野篤子ほか編：世代間交流国際フォーラム——世代をつなぎ地域を再生するために——、世代間交流についての国際研究集会発表原稿集、聖徳大学生涯学習研究所（2007）
- 2) 草野篤子：日本における世代間交流の歩みと今後の展望、(財)全日本社会教育連合会、社会教育、第61巻3月号、pp.8-11（2006）
- 3) 山崎美佐子・角間陽子・草野篤子：異世代間におけるネットワークの可能性——祖父母と孫の交流関係から——、信州大学教育学部紀要第112号、pp.99-110（2004）
- 4) 久保桂子：父親の家事・育児参加と親族の育児援助——保育園児の父母調査より——、家庭科教育第73巻3号、家政教育社、pp.55-59（1999）
- 5) 田中慶子・角間陽子・角尾晋・草野篤子：超高齢社会における世代間交流のあり方——長野市鬼無里地域での実践を通して——、信州大学教育学部紀要第119号、pp.147-156（2007）
- 6) 角間陽子・草野篤子：世代間交流に関する教育行政の取り組み調査、少子高齢社会における世代間交流——インタージェネレーション・プログラムの調査研究——、平成17年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号17530418（研究代表者：白梅学園短期大学 草野篤子）研究成果報告書、pp.53-70（2007）
- 7) アン・クリスティン・ポストロム著、角間陽子訳：スウェーデン・ストックホルムの義務教育における「おじいちゃんプロジェクト（granddad project）」、草野篤子・秋山博介編、現代のエスプリ444号インタージェネレーション、至文堂、pp.82-88（2004）
- 8) 北村亜樹子：福祉政策における世代間交流の視点——中高年・高齢者の保育園派遣事業の試み——、(株)第一生命経済研究所、Life Design REPORT、pp.16-23（2003）
- 9) 角間陽子・石崎恭子：子どもと高齢者の世代間交流における実態と課題——「高齢者の保育補助事業」を中心に——、日本家政学会第60回大会研究発表要旨集、p.135（2008）
- 10) 前掲8)
- 11) 福島忍：少子高齢社会に向けた子ども—高齢者の世代間交流の促進に関する市町村の取り組み——長野県における保育園の中高年・高齢者保育サポーター事業の展開——、長野大学紀要第27巻第2号、pp.25-38（2005）
- 12) 齋藤ゆか：高等教育機関における世代間交流システムの検討——米国の世代間交流プログラムに学ぶ——、聖徳大学生涯学習研究所紀要——生涯学習研究——、第6号、pp.59-67（2008）